

所蔵される書物——円本ブームと教養主義

塩原 亜紀

1 はじめに

昭和初期における大量生産の廉価版全集「円本」のブームは、これまで、総じて文学読者層の拡大、学芸の大衆化の契機として意義づけられることが多かった。⁽¹⁾だが円本ブーム現象面の背後に潜在していた読書欲や実際の受容者層の問題について立ち入ってなされた論考はまだ少ない。⁽²⁾

他方、円本ブームは広告業界にも大きな影響を与えたとされる。円本の宣伝には新聞・雑誌掲載の広告、内容見本、街頭の幟、ビラ散布など、多様な宣伝方法が駆使されたが、ブームを巻き起こしたことにより広告の効用が評価される

ようになったという。⁽³⁾

円本の普及に大きく貢献した広告の中には、人々の読書に対する欲望を巧妙にかきたて、踊らせるいくつかの要素が存在していたと考えられる。⁽⁴⁾本稿では、広告内の言説に着目し、円本受容の前提となるキーワードを拾い、同時代資料を参照しながらこの時代における書物観や文学観の一端を浮かび上がらせていくことを試みる。

2 新中間層と「教養」

当時の広告によれば、円本はそもそもの企画の段階で「特

権階級の芸術を全民衆の前に解放⁽⁵⁾するというキャッチフレーズの下「全民衆・全家庭」⁽⁶⁾に向けて刊行された。とはいえ、ここで言われる「民衆」が、いわゆる特権的富裕層を除く、あらゆる階層を指していたとは考えにくい。なぜなら、新聞広告を主要な宣伝媒体としていたこと自体、結果的に新聞購読の習慣が可能な階層に標的が定められることを意味したし、広告内には「全民衆」に対する呼びかけと同時に、特定の階層を指示する呼びかけもまた存在するからである。

その一つが「読書階級」という呼称である。以下に、その例を引いてみる。

「内容見本発送二百万突破！全読書階級の歓呼！」⁽⁷⁾
「読書階級の正しき批判は本全集の絶大な価値を見誤らなかつた」⁽⁸⁾

この「読書階級」という呼称⁽⁹⁾は、現代では使われない語であるが、読書が階級性をもつ行為、特権的行為であったということを示した極めて時代的・階級の色彩の強い語である。この語は対立概念として「非読書階級」をもつことになるが、広告上で出版社側が標的とする購読者層を「読書階級」と呼ぶ場合、円本があらかじめ読書習慣をもつ階層にある程度狙いを絞って企画されたということになる。

円本購読者の「層」の問題については、永嶺重敏による最近の実証的研究⁽¹⁰⁾によって多くが明らかにされている。永嶺によれば、「円本という大衆化装置は、まずブーム期にあつては、書店を通じての予約購読という形で『所謂中流階級並に学生連』への書物の普及装置としてはたつき、次いでブーム終了後には価格の大幅な下落によって、古本屋や露店の流通経路を通じて、より貧しい労働者や農民層への普及装置として機能するという二段階の大衆化作用をおよぼした」のであつたという。言い換えれば、円本の受容状況には階層的な差異が存在しており、ブーム期において円本の購読者となり得た層はやはり比較的限定されていたといえる。それは「従来から新聞雑誌を定期購読する習慣を身につけ、活字メディアにある程度親しんでいたもので、なおかつ月額一円をなんとか支出できる程度の現金収入を保証された者」すなわち「毎月一定額の月給という定収入を保証されたサラリーマン層」であつた。毎月一冊ずつ刊行される円本は、雑誌購読の習慣を持つ彼らにおいては、雑誌的な読まれ方をしたという。

ここで、永嶺がいう「サラリーマン層」⁽¹¹⁾とは、いわゆる「新中間層」に位置する人々である。新中間層について確認しておく。

大正中期以降、支配階級（資本家）と被支配階級（労働者）の中間に位置する層の内部構成が変化した。医者・教

員・自由業などの「独立技能者」および「中級官僚と恩給生活者」が大正九（一九二〇）年を境として顕著に増加しており、彼らを「新中間層」と呼ぶ。新中間層は、大正三（一九一四）年の七・二万五千人から、昭和五（一九三〇）年には九二万七千人に増大している。⁽¹²⁾

新中間層の多くは農村の中農や士族の二・三男の出身であり、それゆえ生産手段を有しない彼らは、共同体を離れ、旧来の地縁、血縁によらず個人的努力、学業、能力によって地位を切り開かねばならぬ存在であり、地位確立の手段を高等教育による高い教養に求めた。⁽¹³⁾

おりしも、この新中間層が台頭してきた大正中期は、教育制度が大きく変容した時期でもあった。大正七年の高等学校令および大学令の公布を契機として、高等教育就学人口が増大し、教養志向の風潮が高まった時期であった。⁽¹⁴⁾

新中間層が教養獲得の手段として学歴を求めたのは、高等教育が教養涵養の場として規定されていたのみならず、学歴の取得がそのまま教養の「ライセンス」となるような社会状況があったことにも起因する。第一次大戦を境として、学歴による賃金や出世の格差が顕著になり、学歴が地位確立に繋がるようになっていたのである。⁽¹⁵⁾

新中間層は教養を武器に地位確立を目指したが、経済的には恵まれていなかったのが現状で、⁽¹⁶⁾このため、いかに経済的負担をかけずに教養を獲得するかということが重要な

関心事であった。したがって、従来の書籍に比べてはるかに安価で分量の多い円本、それも体系的な知を習得できる「全」集という形態の書籍群は、まさに彼らの欲求に即したものであったといえよう。

このように、円本受容の下地となる読書欲はすでに存在していたものであった。それはもちろん新中間層の教養に対する欲望があつてこそのものであったが、円本という体系的教養書が置かれるべき「空間」がすでに彼らの住宅の中に用意されていたことにも起因する。

3 公的／私的空間としての「書齋」

以下に挙げる広告言説からも出版社が意識していた階層の姿は、よく見えてくる。

世界文学に親しむは、朝に汽車電車を利用し、夕に活動ラヂオを享樂するものの義務だ。屋根にアンテナを張って書齋に本全集を具えないのは恥辱だ。従つて本全集の成果は日本の民衆の世界に於ける好箇のパロメータだ。見よ、各国各時代の代表傑作を網羅して全日本に放送せんとする此の一大マイクロホンの前に、全民衆・全家庭が狂喜して壺円を投じつつある事実を。是れ本全集の絶大なる成功を語るものに非ずして何であろう！⁽¹⁷⁾

新聞を読む習慣を持ち、朝夕の通勤に電車を利用し、ラジオを聴く生活スタイルをもつ者——それは、まさしく新中間層である。だがここで注目すべきは、円本全集が置かれる空間として「書齋」が前提とされていたことである。書齋を有したのは知識人的性格、またそうした職業につく人で、少なくとも一戸建ての住宅に住むことのできる人々に限られる。

新中間層の生活スタイルは当時「文化生活」と呼ばれた。文化生活とは生活様式の和洋折衷を特徴とし、望ましい生活スタイルのモデルとされた。また、大正教養主義が起ったように、物質的のみならず内面的な問題における近代化も言われるようになったのがこの時期であり、人間生活をより総合的にとらえて、これを向上させ改造するという文化生活の概念が生まれた。⁽¹⁸⁾この文化生活の象徴ともいべき存在が「文化住宅」である。

大正期に入って都市部に人口の流入が進み、住宅地が都心から郊外に拡張し始めるのに伴い、郊外に伸びる私鉄の沿線は新興住宅地として次々に開発されていった。⁽¹⁹⁾都市の過密化により住宅問題が人々の間で意識されるようになる⁽²⁰⁾と、よりよい住宅、理想的な住宅を求める住宅改良運動が生まれた。その契機として挙げられるのは、大正四（一九一五）年に開催された国民新聞社主催の家庭博覧会である。そこでは理想的中流住宅の実物展示が行なわれた。ここで、

国民新聞社が提示した新しい住宅が従来と異なる点は、各部屋が壁で仕切られた独立した空間となっていた点、伝統的日本人住宅に洋風の書齋と客間を取り入れた点の二点である。以降、これが継承される形で、住宅改良を主張する動きが雑誌新聞で取り上げられる機会が増え、各地で催された博覧会に住宅が展示された。中でも精力的に活動を行なったのは、住宅改良会という組織で、大正五（一九一六）年、住宅専門会社「あめりか屋」店主の橋口信助と、女子教育家の三角錫子の二人を中心に組織された。住宅改良会の主な活動に、大正五年創刊の住宅専門誌「住宅」の発行（昭和一八（一九四三）年まで）がある。渡米経験をもつ橋口信助が作ったこの雑誌は、住宅改良運動を展開する重要な媒体であり、住宅に関する啓蒙書でもあった。橋口はこの雑誌で、各部屋が独立していない日本住宅の批判を行い、西洋式の住宅を提唱した。だが、完全な洋館は人々の生活感覚からはまだ遠いものであり、実際に流行したのは和洋折衷型住宅となった。

一九世紀後半、和洋館並列型住宅が上流階級の間で流行していたが、二〇世紀になる頃から、中流階級の間にも和洋折衷住宅が提案されるようになってきた。日本住宅に住む人々でさえも、会社では洋服で出勤し、帰宅すると和服に着替えた。社会生活と私生活とで和洋の使い分けを余儀なくされるのが、当時の都市生活者の平均的生活スタイル

であった。そのため、このような実情に即した和洋折衷住宅が設計されるようになった。このタイプの住宅は、寝室や「食事や団らんなどの生活部分は依然として床座式であったが、書斎と客室は椅子座式で計画されていた」⁽²¹⁾という。つまり、家族の生活居住空間、すなわち私的空間が和式であったのに対し、接客空間すなわち公的空間には洋式の間取りが導入されていたという具合に、機能に合わせて異なる様式が与えられていた。

和洋折衷住宅は、住宅改良運動においてそのイメージを普及させていったが、とりわけ大きな影響力を持ったのが、大正一一年三月から七月にかけて上野で開催された平和記念東京博覧会である。会場内に建てられた「文化村」には「実用的簡易小住宅」、通称「文化住宅」と称された、一四棟のモデル住宅⁽²²⁾が集められた。その多くは外観が洋風で、家族本位に設計された居間中心型の住宅であった。これ以後洋風色が強い住宅を「文化住宅」とよぶ現象がおこり、以降、「文化住宅」はこの時期拡張されていく郊外住宅地に建設されていった。

ではこの「文化住宅」において「書斎」がどのように位置付けられていたのか。

既に触れたように、大正期の中流向け和洋折衷住宅において各室を洋式にするか和式にするかという選択は、部屋の機能によりなされるものであった。

このうち「書斎」は「文化住宅」においては客室と同様に「椅子座式」の西洋間として設計されたが、そのことはつまり、「書斎」が公的空間であったことを意味する。この場合の公的とは、主人の仕事場という意味においても成り立つが、書斎はむしろ単なる仕事場・作業場としてのみならず、接客空間としての機能も付与されていたようである。それは、当時の住宅設計図を見れば一目瞭然である。

例えば、「文化村」に展示された一四棟の出品住宅。このうち約半数の六棟の住宅にある「書斎」は、いずれも来客を通すのに便利な位置である玄関脇に配置されており、しかもその名称が住宅設計図もしくは説明書きに「応接間兼書斎」「書斎客室」などとあるように、書斎でありながら接客空間でもあるという二つの役割をもつ空間として「書斎」が規定されていたということがわかる。⁽²³⁾

その一例として、図1の「樋口久五郎氏出品宅」平面図と図2の同住宅の書斎写真⁽²⁴⁾を挙げておく。玄関右脇という、来客を通すのに便利な位置にある、窓に面して机椅子が置かれた空間は「応接兼書斎」と名づけられており、仕事机やガラス戸の本棚のほかに、茶器が置かれたテーブルと二脚の椅子が並べられている。接客を意識してかインテリアにも配慮されており、右手本棚の上には石膏の胸像と写真立てとおぼしき物体が飾られ、向かって左奥の壁には絵が掛けられ、その下には置物が飾られている。



図2

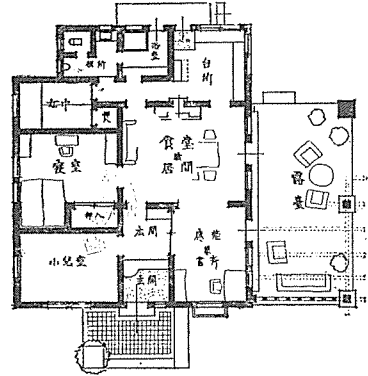


図1

また、「今日の日本住宅に於ける一般の書齋は、多く主人の居間又は昵近者の応接室と云ったような目的に使用されているようである」⁽²⁵⁾ということが住宅論のなかではよく言われている。

「応接間」という接客空間としても機能していたこの「書齋」には、書籍が置かれるべき本棚が設置された。そして、その本棚には円本全集も置かれた。

4 室内装飾としての円本

「文化住宅」の応接間には円本全集が備えられていたことについて大宅壮一が『洋風』の『応接室』には、三脚ばかりのとうイスと、二、三種の円本全集をもってファーニッシュされていることはいうまでもない。」⁽²⁶⁾と言及している。

それでは、接客空間に円本全集を置くということには、単に読むことその他に何か意味があったのだろうか。一つには、装飾品、インテリアとしての機能が考えられる。

円本の広告には「堂々たる威容真に書齋の壮観であり」⁽²⁷⁾というように、装幀の美を謳ったものが多い。⁽²⁸⁾

改造社『現代日本文学全集』の装丁者杉浦非水などは、この全集を「室内装飾の中の書物としてのコンセプトで造本デザインして」いたという。⁽²⁹⁾「改造」大正一五年二月号掲載の『現代日本文学全集』広告に、この全集が「最高最美

の書」であり、「装幀は杉浦非水画伯の苦心に成り、製本技術と相俟って、書斎の一美観」、「此の麗しき全集は書斎の一美観」といったように、室内装飾にふさわしい書物としてデザインされていたことがうかがえる。加えて完結した時「一揃いの書物」はインテリアとして、一冊ごと色や大ききの異なる書物よりもはるかに統一感という点においてすぐれており、ふさわしい。円本が飾り物扱いされていたということは現実にならなくあつたことのように、昭和三年版の『出版年鑑』にも「現在は、いわゆる円本が読まれるよりは飾られ、貯えられるために出版され、購求されている観がある。」と円本ブームの実態が分析されている。⁽³⁰⁾ 飾られる円本——必ずしも読まれる必要のない「見せる」ための書籍の姿がここからはうかがえる。

5 趣味・人格・教養

文化住宅における書斎は公的空間としての機能を有していたが、実際に住宅論の中で強調されたのはむしろ主人の居室という半ば私的な空間としての書斎の役割であった。そもそも住宅改良論の本義が私的居住空間の重視にあつたのだから、これは至極当然のことといえる。作業に疲れた心をリラックスさせる精神「慰安」のはたらきが求められ、そのために室内装飾が配慮されるべきという主張がしばしば

なされた。

要すれに此書斎は閑静なれば小室にて可なり、充分慰安を与うるを目的とし、矢鱈に学ばしめんが為めの几帳面な室では面白くない。単なる書斎としても書斎の本義上精神的向上を謀り、慰安を与え、動的光線でなく、光線の量は余り多からざるを可とする。然し居間と違ひ享樂的気分を助長に勉める程のことはない。⁽³¹⁾

ただここで留意しておかねばならないのは、書斎の本義が精神の「慰安」と同時に「向上」にもあるという点である。「おのずから読書趣味をそられるというような気分」を惹き起こし「沈思黙考して精神の修養」が可能な空間、部屋の雰囲気の内面の向上を促すようなものであるべきとされ、置かれる書籍にも当然そういった役割が求められた。しかしこの「書斎」の雰囲気醸成にとって大事なものは、書籍の外観のみならず、その書籍に「何が書かれているか」ということでもあった。

円本ブーム前後の大正末年、徳富蘇峰は「中産級の家庭」に対して、たとえ読まれなくとも「其の主人夫婦、若しくは子女が、学校時代に使用したる書籍以外に、若しくは其の主人の職業に關係ある書籍以外」の「書籍らしき書籍」を家庭に備えるべきであり、それが「文化生活者」としての

条件であると説いた。⁽³³⁾

所蔵している其事が、既に一種の自由教育である。如何なる書籍愛好家でも、我が蔵書を悉く読み尽す訳ではない、親友や、父母や、妻子や、未だ語を交えざるも、相見で一脈の情趣を相い通ずるではない乎。書籍も亦たこの通りだ。只だ其の表題を見ただけでも、既に無限の興味が湧く。否な所謂る書香を臭いでさえも、吾心の躍るを見ゆ。所蔵しているという意識だけでも沢山だ。(中略) せめて余りに醜俗ならざる書籍をば、一通り家庭に備え、之を一家の鎮守とするは、文化生活者として、必要の条件ではあるまい乎。⁽³⁴⁾

書籍を所蔵すること自体がそのまま精神的涵養に繋がるとする蘇峰の論理は、本来「読む」ことよって達成されるべき精神の涵養が「所有」の段階で達成されてしまうという矛盾を孕みながらも、しかしそのことを矛盾とさせない。書籍が室内の雰囲気を作り出す「装飾」として機能する以上「飾られ、貯えられる」モノが纏う雰囲気、「書香」自体が重要視されるのは何ら矛盾ではないのである。ましてや、必要ある時いつでも書籍を手にとることが出来る可能性が提供される限り、書籍の所蔵は教養獲得に繋がるのだから。

書籍の所蔵自体が社会的に効力を発揮する場合も考えられる。もともと「室内の装飾は総て其室の支配者の趣味を表わす」⁽³⁵⁾といった発想は大正期から言われてきていることであつた。室内の装飾に何を選択するかが、世間の評価に大きく関わってくる。すでに一定の社会的評価が認められたものほど、装飾としては都合がよいことになる。書籍に關していえば、それは教養である。

ここに、書籍のいま一つの機能、趣味・教養の表示機能が浮上してくる。置かれる書籍が教養書であるとき、そこにある書籍は「読む」というよりはむしろ「見せる」ために存在させられ、「書齋」は主人が自らの教養を誇示するための空間となる。そこを訪れた客は、置かれた書籍を見ることで、主の趣味教養を確認する。そのため主人は見せるに備する内容と外観をそなえた書籍をこの接客空間に陳列する必要がある。しかし大正期にあっては、書齋にふさわしい教養書を書棚に陳列するほど買い集めることはなかなか困難なのが現状であつた。それが実現するには、やはり従来に比して廉価な体系的教養書Ⅱ円本の登場を待たねばならなかつたといえる。

6 おわりに

同時代の住宅空間からの円本受容の前提をとらえたとき、

書物を「所有」ないしは「所蔵」することが「読む」として乖離しうるのだという問題が浮かび上がってくる。購求された円本が必ずしも読まれるわけではなかった。円本がその主たる享受者である新中間層の住宅空間に置かれるとき、書籍は純粹な読書の対象としてよりも、眺めて雰囲気にはひたったり、趣味や教養を表示したりする道具としての価値をもつようになる。書籍が教養獲得の達成を表示する機能が付与されたのは、書籍が教養獲得の手段として捉えられ、教養の獲得が社会的上昇や地位向上に効力を発揮するという世相を反映してのことであった。ここに、当時の教養観が表われている。

(注)

- (1) 鈴木敏夫『出版 好不況下 興亡の二世紀』(昭和四五年 出版ニュース社)、『新聞広告二〇〇年 下』(昭和五三年 朝日新聞社)など。
- (2) 具体的な読者のデータを挙げている論考は、前田愛「昭和初頭の読者意識——芸術大衆化の周辺——」(初出「比較文化」昭和四五年三月、のち「近代読者の成立」昭和四八年、有精堂所収)、永嶺重敏「雑誌と読者の近代」(平成九年 日本エディタースクール)、同「モダン都市の読書空間」(平成一三年 日本エディタースクール)がある。
- (3) 『新聞広告二〇〇年 下』(昭和五三年 朝日新聞社)など。
- (4) 円本という企画そのものの魅力であったであろうし、広告その

ものの大きさや活字の組み方といった、視覚的なインパクトであったかもしれない。また、連日掲載されることによる刷り込み効果もあったであろう。

- (5) 改造社『現代日本文学全集』広告(『東京朝日新聞』大正一五年一月一八日)。
- (6) 注(5)に同じ。
- (7) 春秋社『世界大思想全集』広告(『東京朝日新聞』昭和二年三月九日)。
- (8) 近代社『世界大戯曲全集』広告(『東京朝日新聞』昭和二年四月二六日)。
- (9) 「読書階級」については永嶺「モダン都市の読書空間」に詳しい。
- (10) 永嶺「モダン都市の読書空間」。
- (11) サラリーマン層の定義について永嶺は、銀行会社員という狭義の意味で使用すると述べ、官吏や教員は除くとしている。広義には新中間層となる。
- (12) 大橋隆憲「日本の階級構成」(昭和四六年 岩波新書)。
- (13) 沢山美果子「教育家族の成立」『教育——誕生と終焉』(平成二年 藤原書店)。
- (14) 箕田知義「旧制高等学校教育の展開」(昭和五七年 ミネルヴァ書房)、天野郁夫「近代日本高等教育研究」(平成元年 玉川大学出版部)。
- (15) 竹内洋「立身出世主義」(平成九年 NHKライブラリー)。
- (16) 暁鶏閣主人「俸給生活者の生計と利殖法」(大正九年 玉泉堂出版部)、内ヶ崎作三郎「俸給生活者の生活考」(『文化生活』大

正一五年一〇月号) など。

(17) 新潮社『世界文学全集』広告(『東京朝日新聞』昭和二年二月一日)。

(18) 南博編『日本モダニズムの研究』(昭和五十七年 プレイン出版)。

(19) 和田博文『テキストのモダン都市』(平成二年 風媒社)、山口廣編『郊外住宅地の系譜 東京の田園ユートピア』(昭和六二年 鹿島出版会) など参照。

(20) 和田前掲書、内田青蔵ら編著『図説・近代日本住宅史』(平成一三年) など参照。

(21) 内田青蔵『日本の近代住宅』(平成四年 鹿島出版会)。

(22) 建坪二十坪、坪単価二百円以内、居間食堂客間は椅子座敷、実用本位という条件の下出品された。

(23) 洪洋社編『文化村の簡易住宅』(大正一二年 洪洋社)、高橋仁編『文化村住宅設計図説』(大正一二年 鈴木書店)。

(24) 図1・2は前掲『文化村の簡易住宅』による。

(25) 伊東忠太『現代に適應した住宅』(『婦人画報』大正五年一〇月号)。

(26) 大宅壮一『サラリーマンの生活と思想』(初出『サラリーマン』昭和四年)、『大宅壮一全集』第二卷(昭和五六年 桜楓社)所収。

(27) 新潮社『世界文学全集』広告(『東京朝日新聞』昭和二年一月二九日)。

(28) その他の例として、たとえば『日本児童文庫』広告(『東京朝日新聞』昭和二年二月一日)の「驚くような美本」『輝くような文庫』などが挙げられる。

(29) 有山輝雄・高橋世織・十川信介・宮崎修多・紅野謙介(『座談会』出版文化と近代文学』(季刊「文学」一九九八年冬号)。

(30) 武藤直治『出版文化の印象』『出版年鑑』昭和三年版(昭和三年 国際思潮研究会)。

(31) 上浦元秀『理想的住宅の間取り』(大正九年 佐藤出版部)。

(32) 松井清足『書齋の本義』(『住宅』大正六年一〇月号)。

(33) 蘇峰老人『書籍と文化生活』(『文芸春秋』大正一五年四月号)。

(34) 注(33)に同じ。

(35) 奥田誠一『趣味ある室内装飾』(『婦人画報』大正六年一月号)。

また、この人格表示機能の発想は「イギリスでは好い書齋を持っている事はやがてその人の人格表示であると迄云われるようになった」(『書齋を如何に改善すべきか』『住宅』大正八年三月号)とあるように西洋からもたらされたようであるが、いづれの場合も、ようにして日本にもたらされたものであるかについては、今後、調査を要する。

※引用文中におけるかなづかいは現代かなづかいに改めた。また、旧字体は適宜新字体に改め、ルビは省略した。